２０２０／１０／１８　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：一番すぐれているのは愛　３
聖書箇所：コリント人への手紙第一　１３章７－１２節

　パウロはコリントの教会に対して「あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい。」（Ｉコリント１２：３１）と語り、そして、「いちばんすぐれているのは愛だ」とそのように語りました。

Ａ．愛（アガペー）の価値　　１－３節

　愛の至高さ、愛の価値をパウロはコリントの教会に教えるのです。彼が教えたことは、どんなことをしてももし愛が欠けているならすべてが虚しいということです。

Ｂ．愛（アガペー）の実態　　４－７節

　そのことを語ったパウロは、では、この神の愛とはどういうものなのか、そのことを記しています。「愛の実態」を私たちに明らかにします。ですから、４－７節から行動が伴う１５個の神の愛についてパウロの教えを見て来ています。すべては行いが伴うものです。

１．寛容　　４節
２．親切　　４節
３．人をねたみません　　４節
４．自慢せず　　４節
５．高慢になりません　　４節
６．礼儀に反することをせず　　５節
７．自分の利益を求めず　　５節
８．怒らず　　５節
９．人のした悪を思わず　　５節
１０．不正を喜ばず　　６節

　こうして八つの否定的なことが続いた後、１１番目から肯定的なことになります。

１１．真理を喜びます　　６節

　これが「愛」だとパウロは教えたのです。今日は続いて１２番目からです。

１２．すべてをがまんし　　７節

　このことばが教えているのはいろいろないら立ちや腹立たしさ、また、困難に対してそれらに耐える、我慢するということです。バークレーはこのことばについて「愛はいかなる侮辱、いかなる無礼、いかなる失望でも忍ぶことができるという意味だ。」と言います。すでに私たちが愛とはどういうものかを見て来た中で「怒らず」ということがありました。８番目です。怒るということは愛に反することであると見ました。たとえば、人がとても嫌なことを言うかもしれない、酷いことをするかもしれない、どういう意図でそれをしたのかは分からない。しかし、私たちは人としていつも経験することの一つは、そういうことに対して知らず知らずのうちに怒りが込み上げて来ることです。愛というのはそういう中にあっても怒りが自分をコントロールすることを許さないのです。

　もちろん、怒りがすべて悪いわけではありません。イエスの生涯を見ても確かにイエスはお怒りになりました。憶えておられるでしょう。ヨハネ２：１３－１６「**:13 ユダヤ人の過越の祭りが近づき、イエスはエルサレムに上られた。:14 そして、宮の中に、牛や羊や鳩を売る者たちと両替人たちがすわっているのをご覧になり、:15 細なわでむちを作って、羊も牛もみな、宮から追い出し、両替人の金を散らし、その台を倒し、:16 また、鳩を売る者に言われた。「それをここから持って行け。わたしの父の家を商売の家としてはならない。」**」、明らかにお怒りになりました。だから、怒りにも罪でない怒りがあるということです。罪に対する怒りをイエスは持たれたのです。ですから、世の中の罪を見てイエスはどうなさるか？そのような罪に対して怒りがあるのです。ですから、さばきがあるわけです。

　でも今、私たちが愛について学んでいる中での「怒り」というもの、また、ここに「すべてをがまんする」とあります。これは「愛がその人のうちにもたらす働き、そういう行い」なのです。だから、私たちが考えるべきことは、まとめるとこうなります。「愛から出ていない利己的な心から込み上げて来るのはすべて正しくない怒りだ」ということです。たとえば、人が何か言った時、私たちがそれに反発するのは「なぜ、そんなことを言うのだ！あなたの言っていることは間違っている」と思うなら、そこには必ず反発が出て来ます。何か自分のことを指摘されたなら、自分は優れたものだと思っているからそこに反発が起こります。

　多分、皆さんもお気づきと思いますが、４節から出て来た「愛の定義」を見ると、そこには「自分」

というのがありません。自分よりも相手を優先しているのです。自分のことよりも相手のことを考えているのです。このことについては繰り返して見ていきます。最初に見ていただきたいのは、「すべてをがまんする」と言ったときに、いろんなことを言われても耐えなければいけない、心の中は怒りに満ちているのに耐えなければいけないと、そんなことではありません。

確かに、「耐えなさい、がまんしなさい」と言います。実は、この「がまんする」ということは「おおい隠す、包む」という意味があるのです。ですから、聖書の欄外には「おおい」と記されています。このことばにはそういう意味があるのです。そこでまたバークレー師はこう言っています。「愛とは他者の欠点や過ちを白日のもとにさらすことを決してしないという意味だ。」と。つまり、私たちが怒っているとき、私たちの肉はどういうことをしようとするか？その人の失敗やしていること人々に言いふらしたいのです。まさに、復讐しているのです。「あの人はこんなことをした、こんなことを言った」と、その人の悪いことを人々の前で言いふらして、怒りを現すのです。明らかにその人のことを考えていません。大切な自分を傷つけたその人に対して悪い怒りをもって行動しているのです。

ですから、愛というのは人の欠点や過ちを白日のもとにさらさない、人々の前に明らかにしないということです。まさに、肉がしようとすることの全く逆のことです。キャンベル・モルガン師は「このことばはここでは『拒む』という意味で、それはちょうど雨傘のようなもので、それを広げてだれかをその下に招き入れて雨に打たれないようにしてあげることだ。」と言います。つまり、もし、私たちが自分の怒りを人々の前に出して「あの人はこういう人だ」と言ったときに、その人はいろんな攻撃を受けます。そういうことに会わないように守ってあげることです。明らかに、この「がまんする」というのは内側でずっと耐えているということではありません。この人がすることは、その人がその行為を通して人から非難されることから守ってあげるということです。自分がどんなことを言われてもいいのです。この「愛」がすることは、その人が人前で責められないように守るのです。

Ｊ・マッカーサー先生は「愛は失敗や間違いを暴露したり吹聴したりしない。愛はおおい包んで守ろうとする。」と言われます。思い出してください。「寛容」を学んだときにＩペテロ４：８のみことばを見ました。**「何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。」**と。おおうことによってそれを隠すのです。勘違いしないでください。罪があればそれには正しく対処しなければいけません。「罪は見ないようにしよう」ではないのです。ここで言われている「がまんする」というのは、人が自分に何かを言ったとき、何かをしたとき、確かに傷つくかもしれません。そういうことはよくあります。問題はあなたがそれに対してどういう行動を取るかです。愛とは「すべてをおおい包むこと」です。その人が為した失敗が外に出ないように、公にならないように、それによってその人がいろんな批判を受けないようにするのです。肉はそれを喜ぼうとします。

ですから、がまんできない人はいら立ち、腹が立っているので、その人の過ちや欠点を人に言いふらします。「がまんする人」はそのようなことをしません。では、どうすればいいのか？主のところに持っていくのです。主は私たちのことを分かってくださっているからです。そして、「神さま、どうかこの人を愛することができるように。あなたの愛で愛することができるように。」と祈ります。そうしたとき、主はあなたの心を変えてくださらないでしょうか？ですから、「寛容」「親切」「怒らず」「人のした悪を思わず」「がまんすること」、これらに共通していることは「人に対して悪意を抱かない」ということです。

だから、いつも人に対して寛容なのです。どんな悪に対しても、仕返しすることが出来るけれどそんなことはしないのです。却って、善でもって応答するのです。だれに対しても親切になる、どんな人に対してもその人の役に立つように、その人にとって良かれと思うことをしていく。どんな時も怒らず、つまり、怒りが自分の心を支配しないように自分の心を守っていくのです。私たちは言うまでもありません。心が怒りに支配された人の姿を見るときそれは怒りだけがその言動を生み出しています。神の栄光を現すことは不可能です。だから、どんなときも怒りによって支配されることを許さないのです。人のした悪を思わない。それをどこかの記録に留めておいて絶対に忘れないような努力をしないのです。

すべてをがまんする。つまり、こうしてパウロは私たちに愛とはどういうものか、どういう働きをするのかを教えてくれるのですが、それはどんな人でも、たとえ、何をされたとしても、愛は心に怒りという罪が入り込むことを許さないのです。愛は自分のことよりも相手のことを優先するのです。相手を愛しているからです。皆さん、愛したから自分のことはどうでもいいのです。

こんな話があります。二人の遊女がソロモン王のところにやって来ます。二人は子どものことで争っていたのです。二人は同時期に子どもを出産しましたが、そのうちの一人の子どもが亡くなります。自分の子どもが死んだことに気付いた母親は、もう一人の母親の傍らにいる生きている子どもと取り換えるのです。朝になってもう一人の母親は自分の子どもが死んでいることに気付きます。よく見るとその

子は自分が生んだ子どもではないのです。母親は「生きているのがわたしの子で、死んでいるのがあなたの子です。」と言います。「いいえ、死んだのがあなたの子で、生きているのがわたしの子です。」とお互いに言い合うのです。「こっちがわたしの子だ」、「いいえ、そうではない」と。そこで二人はソロモン王のところにやって来るのです。さばきを求めてやって来ました。Ｉ列王記３：１６－２８に書かれていることですが、ソロモン王は大変驚く提案をしました。３：２３－「**:23 そこで王は言った。「ひとりは『生きているのが私の子で、死んでいるのはあなたの子だ』と言い、また、もうひとりは『いや、死んだのがあなたの子で、生きているのが私の子だ』と言う。」:24 そして、王は、「剣をここに持って来なさい」と命じた。剣が王の前に持って来られると、:25 王は言った。「生きている子どもを二つに断ち切り、半分をこちらに、半分をそちらに与えなさい。」:26 すると、生きている子の母親は、自分の子を哀れに思って胸が熱くなり、王に申し立てて言った。「わが君。どうか、その生きている子をあの女にあげてください。決してその子を殺さないでください。」しかし、もうひとりの女は、「それを私のものにも、あなたのものにもしないで、断ち切ってください」と言った。:27 そこで王は宣告を下して言った。「生きている子どもを初めの女に与えなさい。決してその子を殺してはならない。彼女がその子の母親なのだ。」:28 イスラエル人はみな、王が下したさばきを聞いて、王を恐れた。神の知恵が彼のうちにあって、さばきをするのを見たからである。」**、

ソロモンには大変な知恵があったということです。でも、私たちが見たいのは、なぜ、生きた子どもの母親はその子が殺されるとき何を思ったのか？**「自分の子を哀れに思って胸が熱くなり、」**とあります。つまり、その子へのあわれみで心がいっぱいになったのです。自分の愛する子を手放すなどしたくない。でも、この子が生きることを考えるならそれしかないと、母親は自分のことなど考えていません。その子のことを考えているのです。それが愛ではありませんか？主が言われました。ヨハネ１５：１３**「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」**。自分を喜んでだれかのために犠牲にしようとする、それは愛です。

今私たちが見ている「愛」、この愛の実践をしている人は自分のことなど考えていないのです。相手のことを考えているのです。自分がだれかに傷つけられようと、どんなに馬鹿にされようと、そんなことはどうでもいい。神が分かってくださっているからと言います。この愛が為すわざは、自分に課せられた責任をちゃんと覚えるのです。「私はこの人を愛したい。」、だから、その人のことを優先しその人のことを考えるのです。何がこの人に一番いいことなのか、それを考えて行動しようとするのです。だから、愛が成長しているなら自分のことより人のことを、たとえ、その人が自分にどのような悪を働いたとしても、その人への愛が自らの行動を制御するのです。

まさに、そのことをパウロはここに記しているのです。

１３．すべてを信じる　　７節

これは、人を疑うのではなく、信じて信用するということです。レオン・モーリス先生は「諸事情を斟酌した上でも、他人の最善を見続けようと決心した心の在り方を指している。」と言われます。こういうことです。いろんな機会に失望が続くと「もう、君のことは信じられない」と言われたケースとか、言ったケースを私たちは知っています。皆さん、考えていただきたいのは、もし、だれか自分のこどもでもいいですが、「愛している」と言いながらもその子が同じことを繰り返すとき「じゃあ、もうお前のことは信じられない」と言ってその子を育てていくのと、何があっても人が何と言おうと「お前のことを信じている」と言われるのと、どちらがその子に良い影響を及ぼすでしょう？当然、自分の責任を自覚するのは後者のほうです。でも、私たちの肉は「何回同じことをやっているのだ！もう、お前のことは信じない」と…。でも、愛は何があってもその人を信じるのです。それが愛だと言うのです。

実際に、ヨブの友人たちはレッスンを学ぶことになります。みことばを見ると、ヨブの三人の友人たちはヨブのことを大変愛していたようです。ご存じのように、ヨブは大変な試練を経験します。持ち物のすべてを取ってくださいとサタンが主にお願いしました。その通りになります。子どもたちは亡くなり家畜は奪われていく。同時に、彼の足の裏から頭の頂まで悪性の腫瘍が彼を打った。だから、友人たちはヨブであることが分からなかったとあります。彼らがヨブのところにやって来たその理由は、ヨブ記２章から書かれていますが、彼らはヨブに悔やみを言って慰めようとしてやって来たのです。**「テマン人エリファズ、シュアハ人ビルダデ、ナアマ人ツォファル」**です。ところが、実際にヨブの様子を見て、また、ヨブに起こったことを見て、この友人たちの大きな間違いは、このような不幸にヨブが陥ったのは彼が罪を犯したからだと言ったことです。ヨブは「そうではない」と言います。でも、彼らはそう決めてかかっていました。だから、神はこの友人たちにメッセージを与えるのです。最後４２章に記されています。４２：７－８「**:7 さて、【主】がこれらのことばをヨブに語られて後、【主】はテマン人エリファズに仰せられた。「わたしの怒りはあなたとあなたのふたりの友に向かって燃える。それは、あなたがたがわたしについて真実を語らず、わたしのしもべヨブのようではなかったからだ。:8 今、あなたがたは雄牛七頭、雄羊七頭を取って、わたしのしもべヨブのところに行き、あなたがたのために全焼のいけにえをささげよ。わたしのしもべヨブはあなたがたのために祈ろう。わたしは彼を受け入れるので、わたしはあなたがたの恥辱となることはしない。あな**

たがたはわたしについて真実を語らず、わたしのしもべヨブのようではなかったが。」、疑ってしまったこと、それは愛ではないのです。愛とは懐疑心をもって人を扱うのではなく、信じることだと言うのです。

皆さん、あなたもいろいろなことを経験するかもしれません。特に、一番身近な肉親のことを考えます。大切なことは「信じること」です。何があっても…。

１４．すべてを期待し　　７節

全部関連しています。１４番目の「すべてを期待する」というのは、どんなときでも私たちは喜びと確信をもってあることを望んだり希望したり期待したりします。言い方を変えるなら、私たちクリスチャンは期待をもって生きる者たちです。どれ程不可能だと思えるときでも私たちは主に信頼を置いて歩み続けます。たとえば、今も話したように、私たちの子どもたちのことを少し考えてみましょう。愛する子どもたちが神に逆らうことをしたと、そうすると親として希望を失ってしまいます。でも、私たちのうちにもっている愛はそのような中でも期待を失わないのです。「必ず主のみこころが成される」という期待です。なぜ、そう言えるのか？それは恵みの主が働いておられることを知っているからです。

皆さん、神は私たちの祈りを聞いておられるし、神は働きを為してくださるのです。見て来たように、愛は「すべてを信じる」、それは「信じたならそのようになる」ということではなく、信じる価値のある方を私たちは信じているのです。私たちが信じているのは「神」です。全能のお方です。だから、その愛が私たちに期待をもたらしてくれるのです。全く希望が見えない状況にあっても私たちは期待します。「必ず主のみわざが成される」と。

人が失敗するとそのときにその人への期待を失ってしまう傾向が私たちには確かにあります。「もうこの人はだめだ」と。しかし、愛はその中でも主のみわざを信じて期待するのです。どんなみわざを為してくださるのか、そのことを信じてそれを期待するのです。だから、私たちはどんなときでも失望が心を満たし続けることを許さないのです。初めから見て来たように、そして、今日見た詩篇４２篇も同じように、現状だけを見たなら確かに希望を失うことはたくさんあります。でも、私たちはその背後におられる全能の神を見たときに希望が湧くのです。必ず、主のみわざが成されると。私たちが愛している者たちがどのように変えられていくのか。私たちはすべてを知っていません。でも、少なくとも私たちはその人たちのために執り成しをし、神に委ねるときにみこころが為されるのです。これは私たちが何もしなくてもいいということではありません。私たちは主の前に人々の前に「私はこのように生きるのだ」「お父さんは信仰者としてこのように生きていくのだ」「私にとって主は最も大切だからこの方に従う」「お母さんはこのように神を愛して従う」と、このように示すのです。それが私たちにできることです。悲しいことに、私たちは人の心を変えることはできません。でも、私たちが主の前を正しく歩んでいくこと、それが私たちに出来る最大の証です。

全く神に背を向けて歩んでいる子どもがいるかもしれません。親族がいるかもしれません。その中でも私たちは「主はこの人たちの心を変えることができる」という希望をもっています。そのようにして歩んでいますか？愛とはすべてを期待するのです。繰り返しますが、私の願い事が必ず叶うということではありません。主の最善が必ず成されるのです。それが私たちの望みだからです。主は私たちの願いを知ってくださっています。私たちに託された子どもたちをどれ程愛しているかもご存じです。この子どもたちひとり一人が主を愛して主に従うことをどれ程願っているかも知ってくださっています。私たちは子どもたち、職場の人たち友人たちなど、周りの人たちを愛し続けていくのです。必ず主のみわざが成されることを期待しながら…。

１５．すべてを耐え忍びます　　７節

このことばに関してバークレー師は「これはふつう『忍ぶ、耐える』と訳されるが、この語が表す内容は、ただ坐って消極的に何かを我慢するというのではなく、耐えながら、しかも、それを克服し変えていくものである。」と、私たちは耐えながらも前に進んで行くのだと言います。言い方を変えるなら、確かに困難があるかもしれない、苦しみがあるかもしれない、悲しみがあるかもしれない、でも、私たちはそれでも愛し続けていきます。愛とはそうして私たちを押し出していくというのです。

なぜ、このことを言うのか？今まで見て来た１５の事柄を思い出すとき、主がどのように歩まれたかということです。そこに完全な模範があるのです。主は罪人に対して愛を示し続けられました。それは彼らが主を愛したからではなく、却って、彼らは主を憎み続け、その愛を感謝して受け入れることはしませんでした。そんな人々に対して主は愛し続けておられました。主の愛が留まることはなかったのです。主は愛し続けておられました。彼を十字架に磔にしたローマの兵士たちや、十字架につけるように群衆を扇動したユダヤ教のリーダーたちに対しても、我々ならだれ一人例外なく思います。憎しみのことば、恨みのことばを発すると…。「仕方ない、みんな人間なんだからみな弱いから、こんな目に会ったならそんなことばを口にしても仕方ない…」と。しかし、主を見たときにその口からはそのような憎

しみのことばは一言ももれていません。主は彼らのために言われた。「主よ、彼らをお赦しください。…」と。最後の息を吐くその瞬間まで愛されたのです。
信仰者の皆さん、そのことをよくご存じです。覚えてください。その方の愛をあなたも私もいただいたのです。みことばは私たちに「主の愛を模範にしてあなたも努力してそのような愛を持つ人に変わっていきなさい」と、もし、それが主の命令なら私たちは今言わなければなりません。「神さま、それは私にはできません。」と。今、私たちはこの１５個の「愛とはどういうものか、どういう行いをするものなのか？」、それを見て来ました。ハードルは高いです。今の自分自身の歩みを見たときに、果たして自分は「ここに記されているような愛を実践する人なのか？このような愛に生きている人なのか？」と、そのように言われたなら私たちみなが言うのは「全然できていません！」です。
皆さん、もし、私たちがこれで終わって次の学びに入っていくなら、「あぁ、こういうことを聞いたな、こんなことが書いてあったな」となりませんか？それでは困るのです！このテキストが私たちに教えようとしていることは、あなたも私も「このような人として生きていきなさい、このように歩みなさい」ということです。私たちが常に経験することは、みことばを見て実行できるかどうかを自分で判断することです。今、このように生きなさいと言われた私たちひとり一人が普通に思うことは「私には無理だ。もう少し信仰が成長したら可能かもしれない。」と、いろんなエクスキューズを私たちは立てるのです。だから、そういうエクスキューズができないように、いや、聖書がそのことを完全に否定しています。最後にそれを見ましょう。先に言ったように、なぜ、私たちはこのように生きていけるのか？それは、この神の愛を私たちがいただいたからです。テキストとして見ていただきたいのはすでに学んだところですが、Ｉヨハネです。

☆ヨハネの手紙第一　４：７－１２

ヨハネはここで、今見て来た通りこのような愛に生きる人になれるということを言います。

１．愛せる理由　　７－８節

１）神の愛をいただいたから　　７－８節

７節「**:7 愛する者たち。私たちは、互いに愛し合いましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。**」、注意してください。兄弟姉妹、救いに与った私たちクリスチャンが互いに愛し合いましょうと言い、そして、その「愛」は神から来ていると言います。神の特別な愛です。今、私たちはイエスの愛を見ました。最後の最後まで、自分を十字架に釘付けにした人たちに対しても変わらない愛を示したその愛が私たちに与えられているということです。「**愛は神から出ている**」と言っています。私たちのうちにそのような愛がいつの間にか芽生えて来て…ではない。私たちは努力をしてそのような愛を得たのではないのです。神がその愛をくださったのです。ですから、「**愛は神から出ている**」と言ったのはこの愛の出所を明確にしたのです。生まれながらの愛ではありません。私たちの愛は不完全です。条件付きです。でも、神の愛はそれを超越したものです。その愛が実は神からあなたに与えられたと言います。

２）救われたから　　７ｂ節

「**愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。**」、「**生まれ**」、「**知っている**」と二つのことばがあります。どちらも「救い」のことです。あなたは新しく生まれ変わったのです。生まれ変わった者に神が与えてくださった「神の愛」です。「**知っている**」とは個人的に知っていること、つまり、救われていることです。

３）救われているから　　７ｂ－８節

８節「**愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。**」、生まれ変わったからです。

２．神の愛（愛の説明）　　９－１０節

どのような愛なのか？今一度ヨハネは説明をします。９－１０節「**:9 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。**」

１）行いの伴った愛　　９節

「**神はそのひとり子を世に遣わし、**」と行いの伴った愛です。神はひとり子イエスを世に遣わすという行動をもってあなたや私を愛してくださった。そのことを証明してくださったのです。「ひとり子を遣わした」、他に類のない大変ユニークな存在です。神が父親で神が子どもを産んだというのではありません。神は唯一の他に類のないひとり子を世に遣わされたのです。主イエス・キリスト、神である方を人として遣わしてくださったのです。
皆さんに注目していただきたいのは、「神のひとり子」、このことばの前に冠詞が付いています。なぜ、そのような書き方がされているのか？つまり、ただこの方がユニークな方だけでない、このお生ま

れになる方は神であるからです。ですから、皆さんがよくご存じのように、神はご自分のひとり子である主イエス・キリスト、神であられるお方を人としてこの世に遣わされた、そのような行いをもって神は私たちに愛を示されたのです。神の愛にはこうした行いが伴っていました。

２）目的をもって遣わされた　　９節

そこには目的があります。「遣わした」とあります。つまり、任務をもってひとり子を遣わしたということです。だれかの代理として遣わしたと。それは、**「私たちに、いのちを得させ」**るためです。その目的のためにひとり子はこの世に送られて来たのです。

３）意志の伴った愛　　１０節

１０節には**「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、」**とあり、神ご自身の意志がそこにはあるのです。神がそのことを決心されたのです。成り行きではありません。神ご自身がそのことを決めて神ご自身があなたを個人的に愛してくださるのです。クリスチャンの皆さん、あなたを神は特別に愛してくださるのです。

４）犠牲の伴った愛　　１０節

そして、その愛ゆえにあなたのために犠牲を払ってくれたのです。**「私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。」**と書かれています。神はあなたの罪をすべてご存じであるゆえに、その罪に対して怒っておられる。その怒りをなだめることが必要だったのです。旧約の時代にそのことをずっと見て来ました。罪に対して神は怒りをもたれ、それをなだめるためにいけにえがささげられたのです。あなたの罪に対して怒っておられる神の怒りをなだめるために、私たちは何もささげることができなかった。だから、神ご自身がご自分のひとり子を送って、その方をあなたのなだめの供え物として十字架に架けてくださった。ここまでして神はあなたのことを愛してくださったのです。**「私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。」**と。

こうして今私たちはこのすばらしい救いを喜ぶ者とされたのです。このすばらしい救いを感謝する者とされたのです。だから、私たちクリスチャンはこの神が為されたみわざを覚えるときに、いったい、なぜこんなことをしてくださっただろう？なぜ、イエスを遣わしてくださり、なぜ、イエスを私の身代わりに十字架で殺してくださり…？それは私を愛してくださったからだと言うのです。

＊このような私たちを神は愛しあわれんでくださった

結論　：

・主イエスの愛は、私たち、隣人の益のために喜んで犠牲を払うものであった

Ⅰヨハネ３：１６**「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。」**

・主イエスの愛は、「赦し」の伴ったものであった

エペソ４：３２**「お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。」**

３．神の愛の実践　　１１節

ですから、１１節にこのように続きます。**「愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。」**と。私たちはこの主の愛に倣ってその愛を実践するべきだと言うのです。まとめるとヨハネも同じことを言っていませんか？私たちが自らの努力をもって兄弟や周りの人たちを愛するようにと、それができないことは神はご存じです。ですから、神はこうしてすべてのことを備えてくれたわけでしょう。

神ご自身の愛をくださった。その神の愛はことばだけでなく行いが伴いました。そこには大変大きな犠牲が伴いました。神ご自身が示してくださった愛は、ご自分のことを考えるのではなく私たちのことを考えてくださった。今見て来たことです。パウロがくれた定義を見たときそこには自分がないのです。だから、こんな私が大好きだから私が最も愛する私を傷つける人に対して…ではなかった。自分のことなどどうでもよかったのです。そうすると皆さん、思い出しませんか？私たちが神から最も大切な戒めは何か？と言われたとき主は何とお答えになりましたか？**「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」**と、神を愛することが最も大切です。次は何でしたか？**「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」**でした。どこにも「自分を愛しなさい」」とは書かれていません。それが私たちの一番大きな問題だからです。神よりも自分を、隣人よりも自分を愛するのです。

ですから、こうしてヨハネも教えてくれます。主が何を為さったのか？神ご自身の愛を与えてくださったゆえに、私たちは愛し合うことができる。しかも、神の愛をもって愛し合うことができるのです。

４．その理由　　１２節

１２節**「いまだかつて、だれも神を見た者はありません。もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。」**

１）いまだかつて、だれも神を見た者はありません

確かにそうです。霊である神を実際に私たちは不完全な目で見ることはできません。全く聖い神を罪ある私たちは見ることができない。もし、そのようなことがあれば私たちはみな滅ぼされてしまいます。この聖い神の前に立つことができる聖い者はどこにもいないのです。ところが、イエスはこんなことをピリポに言われたことを思い出してください。**「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。」**（ヨハネ１４：９）と。つまり、イエスを見るなら父なる神がどのようなお方かが分かるからです。イエスを通して父なる神を人々は見たのです。だからイエスは**「わたしを見た者は、父を見たのです。」**と言われたのです。

そのイエスが天に凱旋して行かれました。その後どうなったか？イエスが地上におられたときはイエスを通して人々は父なる神を見ましたが、イエスの昇天後はどうなったのか？神は私たちをこの地上に置いてくれたのです。その目的のために…。そのことがここに書かれているのです。

２）もし私たちが互いに愛し合うなら、

条件が記されています。もし、この条件をあなたが満たすなら…、その時に何かが起こります。

・神は私たちのうちにおられ　：　あなたが愛する者として兄弟姉妹を愛しているなら、人々はあなたのうちにあなたを変え続けておられる神を見るのです。あなたのうちに生きておられる神を見るのです。ちょうど、イエスがおられたときにイエスを通して父なる神を人々が見たように、今度はその役割が私たちに与えられたのです。でも、条件がありました。もし、あなたが人を憎んだり人に対して怒りをもっているなら、残念ながら、あなたはこの主を人々の前に示すことができません。

もうひとつ考えなければならないことは、私たちが示している主がどんなお方か？です。間違った主を示すことになっていないかどうかです。聖書のみことばが私たちに教えていることは、今、救いに与った私たち、神の愛をいただいた者たちは、神の愛をもって愛し合うことができるようになったと、そして、それを実践するなら人々は私たちを通して神を見ると、それがヨハネがここで教えたことです。

・全うされる　：　最後にこのことばが書かれています。これは「目標に達する」ということです。信者が互いに愛し合うこと、兄弟を愛することが神の愛の目標なのです。ということは、私たちが互いに愛し合うことによって、神がどんな方であるかを示すだけでない、同様に、神の愛がどのようなものかを世に明らかにしていくのです。

神がなぜ私たちを救ってくださったのか？なぜ、こんなに不完全で罪深い私たちをこの地上に置いておられるのか？この日をくださっているのか？ちゃんと答えは与えられているのです。それはあなたが愛し合うことによって、兄弟を愛することによって神の働きがあなたを通して為されるためにです。神ご自身があなたを通して周りの人たちにご自身を明らかにされる、そのためだというのです。

ですから、こうしてみことばを見ると、今日のテキストでも教えられたように、愛とは行動を生み出していく、それが可能だということに皆さんはお気付きになったはずです。では、それを知った私たちは「主よ、このような愛の人に私を変えてください」と、それがあなたの祈りであるはずです。こういう人になることができると言われるからです。こんな人に愛はあなたを変えていくと言います。そのように願いませんか、皆さん。こんな人になりたいと。それは自分が誉められるためではない、私を造り変えてくださっているこのすばらしい神を人々に示すためです。「どうか愛の人に私を変えてください。このようなことを実践して生きる人に私を変えてください。」と、それによって何とか周りの人たちに、こんな偉大な唯一真の神がおられることを明らかにすることができるのです。

信仰者の皆さん、こういう生き方ができる人へとあなたは生まれ変わったのです。愛をもってあなたは生きることができるのです。そして、そのように歩むなら、あなたの愛する主を人々に示すのです。みことばは私たちに希望をくれます。みことばは私たちに「わたしはあなたをこのような人に変える。そのような働きを今行っている。」と言います。それなら「主よ、そのように変えてください。あなたが教えてくれたように、そして、この愛を実際に行える人にあなたが変えてくださることを私は信じます。」と。すべてのカギは「神の助けをいただきながら生きる」ことです。

今見て来た同じことをパウロはガラテヤ書５章に記しています。「御霊の実」です。「愛、喜び、平安、寛容、親切、…」、神の助けがなければこのように生きることはできません。でも、すばらしい祝福はこのように生きる者へと生まれ変わったことです。主の助けをいただきながらこの一週間をそのように歩みましょう。神のすばらしさが世に明らかにされるために…。